

# 隷母降臨

鮎川かほる

新田香奈と桐山塔子は、互いの息子たちに連日のように抱かれていた。やがて息子たちの行為には加虐性愛が加わりだし、熟れた体をしだいに翻弄されていった。鞭打ちや浣腸さえも美母達は受け入れ、サディスティックな責めに被虐性を高ぶらせて、女の蜜をとろりと吐くのであった。

「逝っちゃう」

透明感のあるきれいな声で昇りつめたことを告げた新田香奈は、上からのしかかっている桐山広太の背

中を両手で抱きしめた。筋肉が隆起した厚い胸板が、乳房を押しつぶしている。まだ、固いもので貫かれたまま、口を吸われた。香奈は積極的に舌を絡める。広太の腰がゆっくり律動し、固いものが抽送されると香奈はまた連続してアクメを迎えた。続けさまに昇りつめる香奈は口を吸われたまま、股間を持ち上げた。深い結合を香奈から求めたのだ。広太の律動が激しくなってくる。挿入されている膣粘膜が爛れるように熱い。香奈は強く抱きしめられたまま、子宮口に熱いしぶきを受けた。香奈もあわせるように今夜何回目かの絶頂を迎えた。それは深い絶頂だった。

「俺たち、相性がいいよな」

広太がペニスを抜くと、香奈はすかさず口に含んだ。愛おしくてたまらない。香奈の中では凶暴なペニスも、今、口の中で勢いを失いつつある。その鈴口を

舌先で愛撫し、喉奥まで呑み込んで奉仕する。ペニスは再びむくむくと勢いを取り戻し、香奈の口いっぱいに膨張しはじめた。

「今度はバックからだ」

広太が完全に勃起したペニスを香奈の口から抜いた。香奈はベッドの上で四つん這いになり、貫かれるのを待った。ずっと貫かれ、一気に子宮口まで届く。男根が抜き差しされると、そのリズムに合わせて尻を前後に揺らし、あえぎ声を漏らし続けた。艶やかな髪を振り乱して

「たまらないわ」

と香奈の熟れた女体は若い男根に翻弄され続けた。汗でしっとりとした裸体から芳しい香りが漂う。結合部分からは湿った音が間断なく響いている。広太に尻を叩かれた。後ろから貫かれ、性交しながら尻を叩かれることに香奈の被虐感が刺激される。男

に征服された気持ちが強く感じられるのだ。男のものになった思いを強くさせられるのだ。また尻肉を叩かれた。こうして性交中に尻を叩かれることへの抵抗感はいつの間にかなくなり、むしろ征服された女の悦びに代わっていた。また香奈は絶頂へと追いつけられていった。

深夜のキッチンで広太のためにパスタをつくった。身につけているのはミニ丈のフリル付きの白いエプロンだけで、それは広太のリクエストだ。恥じらいながらも香奈は応じた。

「形のいい尻だな。俺、香奈の尻に夢中なんだぜ」  
食卓の椅子に座る広太は冷蔵庫から缶ビールを取り出し、ぐいぐいとうまそうに呑んでいる。呑みながら香奈の尻を鑑賞していた。ミニ丈のエプロンは、後ろからは香奈のむっちりとした白い尻がすべて丸見えで、前からは漆黒の恥毛に飾られた股間が隠し

ようもなく見えている。こんな恥ずかしい格好をしていると思うほどに激しい羞恥心が湧き起こる。香奈はすごく恥ずかしいと訴えるがこれは広太のお好みで、今夜が初めてではない。

「友達の母親のお尻がそんなにいいの」

たらこパスタを皿に持った香奈は広太の前にそれを置くと、ゆっくりと後ろ向きになって尻を撫でた。

「ああ、たまらないな。男を狂わせる魅惑の尻だ」  
美熟女の破廉恥な行為に広太は興奮した。

「そんなことされたら、ほら、こんなになっているぜ」

広太の股間はボクサーパンツの中でそそり立っている。それを見せつけるのだ。

「香奈のおまんこの中にこの固くなったものが入りたがっているぜ」

さらに勃起した男根をパンツの中で揺すったりす

る。

「あなたの性欲は無尽蔵だわ。恐ろしいくらいよ」

香奈は広太の股間から視線をあげた。日焼けした精悍な顔つきの広太の顔を見つめた。香奈はこの若者の顔が好きだった。

「これがほしくないのかい。さっきまでこれに貫かれてよがっていただろ？」

「下品な言い方ね。言葉で責めないでよ」

香奈はつぶらな瞳で広太の目を見つめた。

「尻で挑発してきたくせに・・・あとからまたたつぶりと可愛がってやるぜ。今夜はオールナイトだぜ。俺たち相性がいいと思うだろ？」

「わたし、どんどん淫らな女にされていくわ。これでも夫しか知らなかった貞淑な妻だったのよ」

香奈は広太が呑んでいた缶ビールを手にとると一口呑んだ。

「セックスの後の冷たいビールはうまいだろ」

広太は山盛りのパスタを次々と食べながら目で香奈の裸エプロンの姿を眺めている。

「おいしいわ・・・火照った体にいいわ」

香奈は恥じらいながらも笑った。整った白い歯がこぼれた。とても大学生の息子がいるとは思えない若くみずみずしい体だ。エプロンで隠れている乳房は、形よく丸みを帯びてその頂の乳首は可憐なサクランボだ。口に含むと感度がよく可愛い声ですぐに喘ぐ。ウエストは引き締まり、腰から臀部にかけての曲線は悩ましいほどに豊かだ。中でも広太は香奈の尻の形が好きだ。亀裂の深い双臀はむっちりとして肉付きがよく、弾力感に富んでいる。香奈の女の部分も感度がよく、ペニスに絡みつくような肉壁の動きを見せる。女子大生など抱く気になれない極上の熟れた女体だ。

「尻を見せなよ、真也のママさん」

広太の目に欲情の炎がありありと揺れている。

「そんな言い方、いやよ・・・真也のママだなんて」

香奈は長いまつげをしばたかせながら広太を見つめると、やがて素直に後ろ向きになった。パスタを食べ終わった広太が手を伸ばして撫でてくる。それだけで声がもれそうになる。香奈は息子の友人と関係を結び、幾度となく性交をするうちに熟れた体をすっかり開発されてしまったことを痛感している。亡くなった夫との性交は淡泊で、夫は射精を終えるとさっさと体を離れた。しかし広太の性交は激しく濃厚で、そしてペニスは何度も香奈の体に訪れてくるのだ。広太の男根の訪れは女として認められる喜びを与えてくれた。香奈は広太に触れられるだけで感じる体になっていた。声を聞いただけで濡れるのだ。広太のことを思うと体が熱く切なくなる毎日だっ



た。

「ぐっしょりじゃないか」

「あなたに触れられるだけでわたし・・・熱くなるのよ」

香奈は一口飲んだビールの酔いも手伝って大胆な発言をした。

「わたしのお尻、そんなにいいですか」

「ああ、とてもいい。たまらない尻だ」

円を描くように広太は撫でてている。なめらかな尻肌だ。香奈の尻は自然とくねりだしている。

「このお尻はあなたのものよ」

香奈はそう言った後、大胆な発言をしたことに恥じらった。